

平成二十二年 度

宮崎県文化講座研究紀要

第三十七輯

宮崎県立図書館

宮崎県高鍋町所在の持田古墳群
——その形成過程と評価をめぐって——

宮崎県埋蔵文化財センター

今塩屋 毅 行

目次

はじめに

一 持田古墳群の概要

(一) 古墳群の位置と環境

(二) 古墳と横穴墓の分布

二 調査履歴と研究略史

三 持田古墳群の形成過程とその背景

(一) 前方後円墳の編年的研究成果

(二) 持田古墳群の展開とその社会的背景

四 まとめにかえて

おわりに — 今後の課題 —

はじめに

宮崎県下における代表的な古墳群の一つである持田古墳群は、宮崎県高鍋町に所在する。現在の行政区でいう西都市や児湯郡は「児湯」地域にあたる。児湯地域には一ツ瀬川や小丸川の二大河川が流れ、その台地上には西都原古墳群をはじめとする大規模な古墳群が林立している。その東端の一角を持田古墳群が占めている。

この児湯地域は、県内でも最も古墳が集中する地域でもある。その総数は約八〇〇基を数えるともいう。その中には古墳の全長一〇〇mを超える巨大古墳も多く含まれており、古墳時代日向の特色の一つを端的に示している。

持田古墳群は、奇しくも昭和初期の大盗掘という惨禍に見舞われた。出土品の多くが県外に流出して、古墳と古墳群が持つ情報は断片的かつ錯綜する事態となり、埋蔵文化財保護のみならず調査・研究に大きな禍根を残した。

この事件以後、持田古墳群の調査・研究は副葬品と出土古墳との照合作業に始まるが、個々の古墳の副葬品や墳形にも視点が注がれている。その成果から古墳群の形成過程やその性格等が考察されるに至っている。近年では古墳群の保存整備事業が進められ新たな知見が得られている。

本稿は、こうした調査・研究の潮流に立脚しつつ、持田古墳群の形成過程について改めて概括することを企図したものである。

一 持田古墳群の概要

(一) 古墳群の位置と環境

持田古墳群は国指定史跡であり、宮崎県中部に位置する児湯郡高鍋町に所在する。また、町内を南北に分かつ小丸川北岸に広がる標高約五〇mの洪積台地上と沖積地に広がる古墳の総称でもある。

(第三図)。持田台地(鬼ヶ久保・西ヶ原地区) 上が古墳群の主群をなす。台地内には旧石器・弥生時代の遺跡も色濃く包蔵されている。台地南端の持田中尾遺跡では弥生時代前期末～中期前半頃の円形竪穴建物跡が検出され、大陸系磨製石器や朝鮮系無文土器に類似した土器が出土するなど他地域との交流や影響を色濃く示す遺物が出土している。持田三四号墳の西側では、弥生時代後期後半の竪穴建物跡や土坑が、七九号墳の北側で後期の竪穴建物跡二軒が確認された。他方、持田四八号墳と四九号墳の間には高鍋大師(東都原大師廟)が所在しており、地元民や観光客からの崇敬を集めている。また、持田台地の西側、約三・五の川南町西ノ別府地区には、川南古墳群が展開している。

なお、持田台地から東側の谷を挟んだ対岸の台地上には、上ノ別府遺跡がある。古墳時代後期～終末期の集落跡で、竪穴建物跡九軒が調査されたが、本体の一部分に過ぎないと考えられる。

(二) 古墳と横穴墓の分布

古墳として登録された総数は八十五基で、その内訳は前方後円墳九基、帆立貝形古墳一基、円墳七十五基である。古墳の分布は第一図のように、洪積台地上の二グループと沖積地に一グループに区分されるといえる*1。

その内容は、①国道十号線より西側の持田台地上に前方後円墳九基、円墳六十三基と多くの古墳が密集する古墳群の中心域となるグループ、②国道より東側の台地上(染ヶ丘・正祐寺地区)に円墳十一基で構成されるグループ、③その南側にある沖積微高地上(家床地区)に帆立貝形古墳が一基、その南東(鴨野地区)に円墳一基から成るグループとなる。②と③は小規模で分散した立地のあり方である*2。

では、持田台地上のグループ①内における主要古墳の分布をみてみよう(第三・五図)。持田台地は鬼ヶ久保・西ヶ原地区の台地平坦

部とそこから三本の舌状丘陵が派生する。北側より穴ノ谷^{*3}、東光寺、中尾地区の丘陵部にあたる。古墳は、こうした台地平坦部と丘陵尾根上に分布している。

前方後円墳群のうち、最大の規模を有する一号墳（計塚・墳長約百二十m）は台地平坦部の南西側縁辺に位置する。台地平坦部の中央部には十五号墳（石舟塚）や十四号墳が、東側の縁辺に離れた箇所には十六号墳（山ノ神塚）が位置する。また、東光寺地区の丘陵先端部から基部に向かっては、四十八号・三十四号墳・四十六号・三十四号墳と前方後円墳（首長墓）列が連なる。一方、中尾地区の丘陵には三十八号墳一基のみ確認でき、穴ノ谷地区は見当たらない。円墳は台地平坦部と穴ノ谷地区の丘陵尾根部に多く分布する。直径約十m前後といった小円墳や二十mを超える中型円墳の二者がある。現時点では、方墳は確認されていない。

横穴墓は、東光寺横穴墓群と正祐寺横穴墓群がある^{*4}。東光寺横穴墓群は持田台地から派生する東光寺地区の丘陵東面に十四基が存在したとされるが、現在では確認できない。一方、正祐寺横穴墓群は古墳群のグループ②にあたる正祐寺地区の南側崖面に十七基が存在したという。現在六基の存在が確認されている。

二 調査履歴と研究略史

持田古墳群をめぐる調査は、谷口武範氏により昭和六十年代までの経過について詳述されている^{*5}。特筆されるのは、昭和四年（五年）にかけて数多くの古墳が盗掘を受けた事件と梅原末治氏による執念の追跡調査である。

梅原氏は盗掘による出土品（副葬品）と古墳との対応関係や古墳主体部の情報を纏め上げ、古墳の分布図作成と個々の古墳に番号を振り与えて整理報告された^{*6}。第四図はその当時の古墳分布図^{*7}、第五図は現在確認できうる古墳の分布図である^{*8}。

なお、第一・二表は、現在までに内容の一部が判明する古墳を一覧化したものである。

平成に入り、宮崎県史編纂事業の一環として古墳分布図と個々の前方後円墳の測量図が再作成された。^{*9}平成十三年度には高鍋町教育委員会による持田古墳群の保存整備計画が策定され、翌年度より範囲確認調査が進められている。

持田古墳群を理解する上での鍵は、首長墓（前方後円墳）の動向である。古墳群における首長墓の変遷過程を追究するなかで、出土品（副葬品）自体の研究や古墳の編年（築造順に配列）作業や系譜（関係性を有するつながり、グループ）の把握が進められてきた。

近年にいたり、柳沢一男氏は高精度の墳丘測量図をもとに畿内の大王墓との墳丘比較を通して宮崎県内の古墳時代前期の前方後円墳を類型化し、その築造時期を推定して各古墳群における首長墓系譜の消長を整理された^{*10}。持田古墳群の首長墓にも言及されている。

柳沢氏の研究手法は、前方後円墳（首長墓）の墳形や規格性に着目した分類と類型化および築造年代の検討である。第八図のような前方後円墳の築造序列は、柳沢一男氏^{*11}や和田理啓氏^{*12}による研究が現段階の到達点を示している。なお、柳沢氏が提唱した墳丘の諸類型群については、その後の実証的な発掘調査と成果との検討作業が進められている。

前述のような一連の研究成果と他地域の古墳や古墳群との通時的・共時的な比較検討を経て、これらが内包する諸特徴や特質（首長そのものの性格や畿内王権との関係、地域間の勢力変動など）が描き出され、その社会的背景をも追究することで地域史の解明にも昇華されてきた^{*13}。

それでは次項にてこれら研究成果について触れることとしたい。

三 持田古墳群の形成過程とその背景

(一) 前方後円墳の編年的研究成果

近年においては、持田古墳群における前方後円墳(首長墓)の変遷(編年)観は、研究者間で築造時期や系譜の捉え方等の違いはあるにせよ、大方は一致した見解になるようである。

つまり、持田四八号墳(墳長八十五m)↓一号墳(百二〇m)↓四七号墳(五十四m)↓六二号墳(五〇m)↓三四号墳(五十九m)↓二六号墳(四十六m)↓十五号墳(四十一m)への変遷過程である(第七図)。

その変遷過程からは、持田古墳群には古墳時代前期(四世紀)に始まり、後期(六世紀・前方後円墳の築造停止段階)までを通じて累代的な(世代を継いで間断なく築造される)前方後円墳(首長墓)の系譜が読み取れる。柳沢一男氏は、こうした安定的な首長墓系列を「長期型首長墓系譜」と呼称しておられる^{*14}。

(二) 持田古墳群の展開とその社会的背景

持田古墳群における古墳の出現と消滅過程については、既に谷口武範氏^{*15}や長津宗重氏らに^{*16}よって言及されてきた。県内では有数の出土量を誇る銅鏡三十四面の意義についても鈴木重治氏^{*17}や谷口氏、長津氏により言及されてきた。先学による知見を尊重しつつ、持田古墳群の展開過程とその背景について、改めて整理する。

私見としては、持田古墳群の出現と終焉過程を大きく七つの画期に捉えた。次に各画期ごとに概要を述べることにしたい。

(I) 古墳の出現(四世紀前葉)

現時点では、持田古墳群における最古段階の古墳とその様相は、断片的かつ不明確と言わざるを得ない。ただし、三角縁神獣鏡の存在から推量することは可能である。

この三角縁神獣鏡は二面出土している。伝持田古墳群出土とされる「天王日月」銘と旧四八号墳(円墳・直径二〇m)の出土鏡である。長津宗重氏によると、前者は京都府椿井大塚山古墳や奈良県黒塚古墳出土鏡など、後者は群馬県天神山古墳出土鏡等と同範鏡(同じ鑄型で作られた鏡)とされる^{*18}。

「天王日月」銘鏡が確実に持田古墳群に伴うならば、椿井大塚山古墳の築造時期から導くと、紀元三世紀末葉ないし四世紀前葉には畿内王権から持田古墳群の首長層に対して地域支配の確認や王権との関係性を示す証として三角縁神獣鏡が分与されたようである。

しかし、「天王日月」銘鏡の古墳は特定できず、旧四八号墳は円墳であって前方後円墳ではない。前述のとおり、持田古墳群における古墳の出現期の様相は不明な点が多い。

児湯地域全体の動向に目を向けると、四世紀初頭と前葉段階には西都原古墳群の八一号墳(纏向型?の前方後円墳)や新富町下屋敷古墳(円墳?)が築造されたとされる^{*19}。

(II) 勢力の伸張(四世紀中葉～後葉)

現時点における、持田古墳群における最古級の前方後円墳は一号墳(計塚・全長百二〇m)と四八号(八十五m)等がある。柳沢一男氏は、宮崎県内の前期古墳の墳形を検討して、前方部の長さが墳長の二分の程度となる前方後円墳を「柄鏡形類型」とした上で三型式に分類された^{*20}。

持田古墳群では、四十八号墳を柄鏡形類型に先行する行燈山類型として四世紀中葉に、一号墳を柄鏡形のa類型とみなして四世紀後半の柄鏡形類型の出現期古墳と位置づけた^{*21}。さらに四七号墳(五十四m)をb類型の四世紀後葉に、四六号墳(五十一m)をc類型の四世紀後葉と五世紀初頭に比定されている。なお、和田理啓氏は四八号墳を前方部端が撥形に開く「纏向型」の墳形とみる^{*22}。

四世紀中葉～後葉の段階は、柄鏡形前方後円墳の盛行期で、

一〇〇mを超える首長墳が持田古墳群や川南古墳群（十一・三九号墳）に築造される。一〇〇m超級の巨大な柄鏡型前方後円墳の築造は、西都原古墳群等の一ツ瀬川流域に展開する古墳群には認められない。持田・川南古墳群は、他の古墳群に対しての優位性が感じられ、かの首長層が児湯地域の盟主的座にあった時期と捉えられる。

この勢力伸張期の首長墳の築造位置に注目すると、一号墳以外は東光寺地区の丘陵が墓域となる。丘陵先端部の四八号墳に始まり、四七号↓四六号墳の順に丘陵基部に向けて累代的な築造順となる。対して一号墳は、四七号墳と前後して築造されるが、小丸川に面した持田台地西側縁辺部に墓域を違えて且つ単独で立地する。

この一号墳の特異性は、四六・四七号墳の全長五〇m級から独立した首長の存在や複数系譜化の現象とも解釈される。つまり、小丸川流域の地域集団を掌握する首長墓の系譜と、より広範な地域連合体の盟主としての象徴的な首長墓の登場と考えたい。なお、この段階の首長墳に採用される埋葬主体部は竪穴式石室や粘土槨を採用するのが特徴的である。

（Ⅲ）西都原古墳群の勢力下へ（四世紀末～五世紀前葉）

現時点では、持田一号墳の系譜を引く柄鏡形類型の大型墳は確認できない。四六号墳に後続する首長墳としては三四号墳（前方後円墳：約五十九m）を充てておきたい。墳丘規模は六十m級だが、柄鏡形の墳形は採用されない。これ以降の首長墓（前方後円墳）の墳丘主軸は地形に左右されたのか、北北西優位から北西優位となる。築造時期は墳形や周溝（盾形？）の存在や、墳丘周辺で表面採集された円筒埴輪^{*23}の型式から五世紀前葉～中葉としたい。

一方、五世紀初頭頃に持田台地下の沖積低地上に六二号墳（亀塚：全長五〇m）が築造されるようだ。今のところ、先行する首長墳は確認できず、単独の立地で忽然と出現とした感がある。帆立貝式古墳であることも異色である。

四世紀末葉～五世紀初頭は、折りしも西都原古墳群の女狭穂塚（柳沢一男氏のいう仲津山類型）・男狭穂塚（帆立貝式古墳）といった九州有数の巨大古墳が築造される段階である。持田古墳群における、大型の柄鏡形首長墳が衰退して他勢力への優位性が崩れたのみならず、柄鏡形という伝統的な墳形が廃れ、墳丘に帆立貝形式を選択する変化も生じた時期でもある。六二号墳、すなわち帆立貝式古墳の登場は男狭穂塚の存在と全く無縁ではないだろう。これらの変化は、西都原古墳群の勢力が南九州各地域を束ねる首長連合体の盟主の座を獲得した影響によるものと考えたい。

また、六二号墳の立地形態からは、持田古墳群首長層の動揺や混乱状態の反映とも解されるし、沖積低地の耕地開発・進出とその生産基盤拡大に伴う新たな首長墓系譜の樹立とも想定される。

ちなみに、三四号墳と同じ頃に中尾地区の丘陵唯一の前方後円墳である三九号墳（全長二十九m）が築造されたこと、長津氏は見ておられる^{*24}。その場合、首長墓系譜は三系統となる。

このように四世紀末～五世紀前葉の段階は、持田勢力が小地域首長の地位へと減退する現象、その内部では首長層の階層化や分出の動きが認められる時期である。結果として、北郷泰道氏や谷口氏の指摘する、複数の首長墓系譜が派生したのであろう^{*25}。

（Ⅳ）古墳群内の勢力変動（五世紀中葉～後葉）

持田三四号墳の次の首長墓として十五号墳（石舟塚：四六m）を充てておきたい。十五号墳の築造位置は、四八号↓三四号墳への築造順が読み取れる東光寺地区の丘陵尾根線の延長上にあたるが、持田台地内部へと大きく距離が離れた選地形態となる。全長は縮小化し、前方部は平面三角形となり後部径と前方部幅が等しいか前方部幅が長い墳形となる。

林田和人氏は、後円部より出土した舟形石棺を五世紀前葉～中葉とみる^{*26}。よって五世紀中葉までには築造されるようだ。なお、

現時点では三九号・六二（亀塚）号墳の後継となる首長墓は確認できず、首長墓系譜は一系統に再編成された感がある。

他方、十五号墳から東側の持田台地中央部には七六号・二三号・二七号墳が分布する。二三号・二七号墳は二〇～三〇m級の円墳だが、七六号は帆立貝式古墳の可能性が指摘されている^{*27}。この三古墳に、画文帯神獸鏡が副葬されるのが注意を引く。

この二三号・二七号墳の出土鏡は、熊本県江田船山古墳や岡山県茶臼山古墳出土鏡と同型鏡（踏み返し鏡）とされる。七六号墳出土の画文帯環状乳神獸鏡は江田船山古墳や福岡県山ノ神古墳出土鏡と同範鏡の關係にある^{*28}。江田船山古墳は五世紀後葉の築造^{*29}とされるので、これら三古墳も準じた時期と考えておきたい。

この画文帯神獸鏡の評価をめくり、様々な意見が唱えられている。鈴木重治氏は江田船山古墳出土鏡との同型・同範鏡という点を重視して、日向と肥後の関わりの強さの反映とみなす^{*30}。谷口武範氏は「畿内政権から分有されたもの」^{*31}とみた。

長津宗重氏は、鏡の出土した円墳を「前方後円墳（首長層）よりも一ランク下の階層の墓」と位置付けたうえで、鏡の来歴を畿内政権から直接的ないし間接的に配布されたか、江南（中国南朝）貿易によるものとみた。前者の場合、円墳の被葬者層が前方後円墳を築造可能な勢力へと伸張したが、畿内政権により「前方後円墳という墓制が規制され（のための）、その代償措置」により分与されたものと考えられておられる^{*32}。

少なくとも、持田古墳群は首長層よりも下位の有力層（中間層）に銅鏡の分与がなされた特色を有することは間違いないであろう。

さらに、二七号墳は画文帯神獸鏡と銅鈴（馬具の一つ）が伴うことに着目したい。この銅鈴が副葬される古墳は他に九号・三十号・五〇号墳例が挙げられるが、全て画文帯神獸鏡は有しない二〇～三〇m級の円墳である。銅鈴の副葬事例の多さは持田古墳群の特徴といえる。銅鈴副葬の盛行期は五世紀後葉～六世紀中葉で^{*33}、

五〇号墳では須恵器坏が副葬されているから、前述の円墳は当該期の間には築造されたようである。これら五世紀後葉～六世紀中葉代の円墳群は、丘陵部ではなく持田台地本体の内部や縁辺付近に面的に広く展開するが、点的な立地で群集・密集的ではない。

五世紀後葉に入ると、伝統的首長層の絶対的優位性が崩れ、新興勢力による円墳築造といった古式群集墳の様相が現出する。この段階の埋葬主体部は竪穴式石室は採用されず、木棺直葬や土壙墓が主流となり石棺（十五号墳）も選択される。

（V）前方後円墳の縮小と築造停止（六世紀初頭～中葉）

持田十五号墳の後継首長墳は、墳丘規模やその副葬品の年代から勘案すると、二六号（山ノ神塚：四十六m）と十四号墳（四十一m）がその候補となる。二基の規模四十m級に縮小傾向にあり、これが六世紀代首長墓の特徴といえる。十五号と二六号墳の立地は、持田台地内部で彼我の距離を隔てた単独墳となる形態をとる。

では、各古墳の築造時期を検討しておく。二六号墳の墳丘主軸は十五号墳と平行するが、その墳形は前方部幅が後円部径を凌駕形態となる。築造当初の埋葬施設に伴うとみられる副葬品には、鉄地銀被せの三葉環頭大刀が二振認められる。この大刀は、六世紀初頭の舶載品（新羅産）と考えられおり^{*34}、二六号墳は六世紀初頭～前葉段階には築造されたと想定される。

一方、十四号墳は墳形的には二六号墳と類似するが、墳丘主軸は異なり、全長はやや小さい。副葬品の年代から築造時期を探るのは困難なので、同じく出土品の円筒埴輪や形象埴輪片に着目したい。

甲斐貴充氏は、埴輪片を川西編年のV期（五世紀後葉～六世紀代）とみる^{*35}。十四号墳の築造時期を現存する資料で特定するのは困難だが、状況証拠からではあるが、二六号↓十四号墳への築造順を想定しておきたい。

現時点では、十四号墳の後継首長墳は確認できないので、十四号

墳を以つて前方後円墳の築造が停止されたと考えたい。六世紀前葉段階になると祇園原古墳群の百足塚古墳や石船古墳群の（新田原）四五号墳といった首長墓級前方後円墳の内部主体に横穴式石室が導入される。持田古墳群の場合、それは確認できていない。

一方、五世紀代に引き続き六世紀中葉段階にも銅鈴を副葬品に持つ円墳が築造されるようである。十二・十三号墳といった、小銅鏡が副葬品の二十m級円墳もこの段階には築造されたとみられる。

（Ⅵ）首長墳と後期群集墳（六世紀後葉～七世紀前葉）

西都原古墳群や新富町石船古墳群例では、前方後円墳の築造が停止（規制）後の首長墳は、円墳ないし方墳で内部主体に横穴式石室^{*36}が採用するようだ。この観点に立脚するならば、持田十四号墳に後出する首長墓は現在のところ八十四号墳が該当する。八十四号墳は円墳で直径（墳丘径）十三mを測る。周溝は二重に巡る可能性が指摘されている^{*37}。津曲大祐氏は横穴式石室の構造から、六世紀中葉～後葉の築造時期を与えている^{*38}。

また、横穴式石室墳の可能性がある古墳も一基ある。それは梅原氏のいう「無号石室墳」^{*39}である。現五号墳の南西側約五〇mの地点（鬼ヶ久保B遺跡）にあるとされる^{*40}。

石室の規模や構造等の詳細は不明だが、その築造時期は昭和五十四年調査で出土した須恵器蓋坏の型式の年代と梅原氏が本墳出土と認定した瑠璃製勾玉は「コ」の字形に近い粗造品で高鍋町牛牧一号墳（七世紀前葉～中葉の複次埋葬）主体部出土^{*41}と類似するから、七世紀前葉の築造と考えられる。

築造時期のおおよそが判明する円墳は、持田台地の西側から、旧二・八号墳と現在の三号墳、旧四九号墳、旧三十一号墳、現在の三〇号墳、旧五三号（横穴式石室？）・旧五四号・旧五七号・現在の五三号墳等で六～七世紀代（古墳時代後期～終末期）と考えられる。このうち、旧四九号や現五十六号墳といった二〇m級円墳の縦穴系

埋葬主体部に豪華な金銅装馬具セットが副葬されており、馬具は六世紀中葉～後葉にかけての時期が与えられている^{*42}。

これら円墳群の位置に着目すると、持田台地内部では大きく三箇所^①に六～七世紀代の円墳群が分布することがわかる。第四・五図を参照すると、旧二・八号墳と現三号墳を含む一帯（A群）は円墳が東西方向に帯状に展開するようにみえる。この一群に現四・六号墳も含まれるようだ。この現五号墳の北西約五十mの付近に持田無号石室墳が存在する。旧四十九号墳付近の円墳群（B群）も密集形態から一群と考えられる。また、旧五四号・旧五七号および五三号墳といった円墳群（C群）は穴の谷地区の丘陵基部と持田台地北東側縁辺に広がり、その中に八四号墳が内在する。

このように六世紀後葉段階に入ると、A～C群といった高塚古墳（中小円墳）による群集墳化（後期群集墳）が認められる。B・C群内には直径二〇m級で豪華な副葬品を有する円墳も認められ、中核的な古墳の存在が特色である^{*43}。A・C群においては、首長墳（横穴式石室墳）は、群集墳内に取り込まれた格好となる。

六世紀後半段階になると、既存の古墳（異なる時期の築造墳）に馬具や装飾大刀等の首長層級に匹敵する副葬品を持つ縦穴系埋葬施設が新たに設けられる現象も認められる（三四号・七六号墳例）。さらに、二六号墳例のように縦穴系埋葬施設の古墳に複次埋葬が行われる。一墳一葬といった縦穴原理から追葬という横穴原理の埋葬觀念が取り入れられたようだ。同様な例は西都原古墳群二百二号墳（姫塚）にも認められる。

このように前方後円墳築造停止後、首長層は埋葬主体部に横穴式石室を採用するが、従来の縦穴系埋葬施設（木棺）も併用し、共に家族墓化への方向を進む。有力集団層の古墳にも横穴式石室が採用されていた可能性もある。首長墳は従来の単独立地形態から、下位の有力集団の円墳群（群集墳）内に埋没してしまい、墳形や墳丘規模といった差異も不明瞭となる。首長層よりも下位の有力集団の勢

力伸張が六世紀後半代にも継続していたようだ。

この現象は、首長墓系譜が複数存在するのか、伝統的首長層に拮抗するほどに成長した複数の有力集団の存在を示すのかははっきりしない。しかし、金銅装馬具や金銅装大刀の副葬事例は、銅鏡に代わる、畿内王権と地域支配者との関係性を示す新たな証として分与されたと考えられる。六世紀後半代の群集墳化に表徴される持田古墳群内部の勢力変動と、王権の地方直接支配に向けた動きと連動していたと解したい。

(Ⅶ) 持田古墳群の終焉（七世紀前葉～中葉）

築造時期の下限となる高塚古墳は、持田無号石室墳で七世紀前葉段階である。それ以降の様相は不明確である。持田古墳群における高塚古墳の終焉過程とその時期は把握しづらい現状であるが、先行研究から糸口を探りたい。

藤本貴仁氏は、横穴墓群の分析を進めるなかで、宮崎平野部では六～七世紀において高塚古墳から地下式横穴墓や横穴墓へ墓制が転換すると指摘された^{*44}。

持田古墳群の場合は、東光寺横穴墓群と正祐寺横穴墓群が台地下に存在するので、高塚古墳⇩横穴墓への墓制転換が推定される。東光寺横穴墓群は詳細不明だが、正祐寺横穴墓群は古墳群との位置関係から染ヶ丘・正祐寺地区の小円墳群との関係性が強い。七世紀中葉頃には造営されたようで、墓制の転換期はその前後と見られる。

持田台地（古墳群本体）における七世紀前葉以降の墓制の動向を把握することは、持田古墳群を理解する上での要点ともなろう。

なお、小丸川対岸の牛牧古墳群では、七世紀前葉～中葉の地下式横穴墓群が検出された。高塚古墳に寄生する地下式横穴墓も確認された。地下式横穴墓分布域が小丸川南岸域まで変更を迫った重要な調査成果である。この分布域の北限はどこまでなのか、持田古墳群の終焉を考える上で重要な視点でもあろう^{*45}。

四 まとめにかえて

「児湯」地域における持田古墳群の消長を、西都原古墳群や祇園原古墳群等の大規模古墳群と比較してまとめたい。

持田古墳群は、前項までの検討のように四世紀前葉段階に古墳の築造が始まったと考えられる。一ツ瀬川流域の代表的古墳群の西都原古墳群において四世紀初頭段階には最古の前方後円墳が築造される。四世紀後葉段階には持田一号墳に代表される大型の柄鏡形前方後円墳が持田・川南古墳群で築造された事実から、小丸川流域の勢力伸張とその勢力が児湯地域の盟主的地位にあったと読み取れる。

しかし、五世紀初頭段階に入ると勢力図は一変する。男狭穂・女狭穂塚に代表される西都原古墳群の勢力は、児湯地域を含む日向全体の盟主として一躍登場する。これ以降一ツ瀬川流域の勢力が児湯地域の中心的存在となり、小丸川流域の勢力は全長一〇〇mを超える前方後円墳を生み出せなくなる。

ただし、一ツ瀬川流域の古墳群は終始安泰に勢力を保持した訳ではなく、首長墓系譜の途絶と復活や広域盟主墳の再登場という変動の激しさと顕著な勢力の盛衰を各古墳群に見る。

その対極にあるのが、小丸川流域の勢力（持田・川南古墳群）である。五世紀代以降、一ツ瀬川流域の勢力を再び凌駕するに至らなかったが、一貫して安定的な一定規模の勢力を維持し続け、安定的な前方後円墳の継続的築造（累代的な首長墓）を成し得ている。

一見安定的な勢力と思しき、持田古墳群内部では五世紀後葉以降、中間層の勢力伸張が顕著となる。首長を頂点とするピラミッド構造には変異と矛盾が進行していたようだ。また、三角縁神獣鏡、画文帯神獣鏡や金銅製大刀^{*46}や馬具類の存在は、畿内王権からの分有を通じた継続的な関係性が読み取れ、持田古墳群の被葬者達が抱える社会的背景を特色づけている。

この畿内王権と在地首長やその成員達との関係性をどう読み取る

かは、各地の首長層を掌握していく畿内王権の動向と連関しているだろう。特に画文帯神獸鏡分有の意義については、前方後円墳の築造に着目した長津氏と、列島弧と東アジア的視点にたった谷口氏の言説を再度触れておく必要があるだろう。

谷口氏は鏡の分有関係を、直木孝次郎氏の畿内王権への地方首長層の出仕（官人化）、福尾正彦氏の熊本県江田船山古墳の被葬者を中心とした南朝鮮経営のための兵站的役割を担わせたとする説を紹介してその妥当性を検討されている^{*47}。

こうして、児湯地域のみならず宮崎県内屈指の古墳群である持田古墳群は、六世紀中葉を境に首長墳たる前方後円墳は築造を停止する一大転機を迎える。それ以降、高塚古墳の群集墳化と古墳自体の築造停止（規制）から横穴墓への転換へと、律令国家体制成立に向けた墓制の急激な変革に翻弄されつつ、七世紀中葉には古墳群としての長い命脈を終えたのである。

おわりに ― 今後の課題 ―

現在、高鍋町教育委員会では持田古墳群を公開し保存するため、古墳範囲確認調査が実施されている。古墳に関する基礎資料の収集に欠かせない作業が続けられており、調査進展と整備に期待される。

近年、古墳時代の始まりと終わり頃の墳墓について新知見が得られ始めている。小丸川・一ツ瀬川流域では、高塚古墳出現前夜の墓制である周溝墓が確認された。川南町東平下遺跡（円形・方形）や赤坂遺跡（円形）は古墳時代初頭（三世紀前葉）の、新富町川床遺跡では古墳時代初頭～前期前半（三世紀前葉～四世紀前葉）の円形周溝墓と多数の土壙墓群も検出された。西都原古墳群の無号B号墳（二・四号墳）や茶臼原古墳群内の上野遺跡二号墓といった「墳丘墓」と指摘される墳墓も検出されている^{*48}。

持田古墳群の位置する持田台地上には、弥生時代後期～終末期に

あたる集落の存在は確実視されるから、持田古墳群出現の背景となる集落の様相と高塚古墳出現前夜の墓制の追究が必要なるう。

持田古墳群を造営した人々の集落にも視点を向けるべきである。古墳時代集落は上ノ別府遺跡のみが知られているが、周辺の遺跡に目を向けると高鍋町毛作古墳群内の毛作第一遺跡や、牛牧古墳群内の下耳切第三遺跡、川南古墳群内の尾花A遺跡、新富町祇園原古墳群内の春日地区遺跡のように、同一古墳群内に集落が含まれる事例が多い。持田台地内部に古墳時代集落が存在した可能性は否定できず、今後の調査進展が望まれる。

さらに、小丸川流域の古墳群分布にも注意が必要である。小丸川北岸の台地上には二大古墳群が展開するのに対し、南岸台地上は数多い小規模古墳群が分散するあり方に注意が喚起される。果たして、その違いは何であろうか。持田古墳群と他古墳群との関係、大規模古墳群を現出させた社会的背景（食料・馬匹生産・河川や港といった交通の拠点等の経済基盤）の検討も含めて、古墳時代の地域像を追究していく上での検討課題が未だ数多く残されている。

この稿を執筆する機会を与えてくださった宮崎県図書館の粕木郁朗、岡崎裕也の各氏には大変お世話になりました。宮崎県埋蔵文化財センターの山田洋一郎氏には文献等のご教示を得、小蘭博子氏には一覧表作成等のご協力を得た。記して感謝いたします。

註

*1 *9 山本格「第四部持田古墳群」『宮崎県史叢書宮崎県前方後円墳集成』宮崎県一九九九年

*2 このように持田古墳群はかなり広大な面積に古墳が分布する古墳群となるが、これは昭和三十六年の国指定史跡として本指定を受けた際に一括登録された関係による。グループ①と②には大きな開析谷が2箇所入り、その立地は大きく分断され

る。グループ③は台地上ではなく沖積地である、グループ②は小円墳主体で横穴墓群（正祐寺横穴墓群）と近することから後期群集墳の可能性があること等、立地とグループ間の位置関係や構成が大きく異なる。これを持田古墳群内の支群と捉えるのか、別個の古墳群と捉えるのか、検討が必要である。

*3 梅原末治氏の報文中では当該地点を「北（空）ノ谷」としているが、同書の古墳分布図中には「穴の谷」と読める。『高鍋町遺跡詳細分布調査報告書』中でも「持田字穴ノ谷」と掲載されているので、こちらに従う。梅原末治『持田古墳群』宮崎県教育委員会 一九六九年

*4 九州前方後円墳研究会編『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第Ⅱ分冊（資料編）二〇〇一年

*5 *8 谷口武範「三十一持田古墳群」『宮崎県史』資料編考 古二宮崎県 一九九三年

*6 梅原末治『持田古墳群』宮崎県教育委員会 一九六九年

なお、持田古墳群出土品には川南古墳群など他古墳群資料が混在する可能性が指摘されている。しかしながら、梅原末治氏の業績なしには現在までの研究進展は望むべくもなく、多方面からの継続的な検証作業が必要である。

*7 現在、古墳の標柱に記載された号名は、国史跡指定時（昭和三十六年）の「新番号」で、『持田古墳群』報告書中の号名「旧番号」とは一致しない。分布図中の古墳と現存する古墳との位置関係が照合しない場合もある（旧四十八・四十九号墳）。また、第四図と五図を比較すると、昭和十二年段階で古墳と認定されていた墳丘が、昭和三十六年や平成九年刊行の分布図で確認されない古墳も多い。①グループにある持田中尾古墳（旧四十号墳？）は発掘調査により現存していない。十一号と二十一号墳の間に無番号墳（現存）が存在し、三四号の北側や二号の北側で墳丘が消失した古墳の周溝が確認されたとい

う（谷口一九九三年）。従って、本来の総数は九〇基を優に超え、墳丘が失われて地表面には現れていない古墳や滅失した古墳が存在している可能性は高い。

北郷泰道『持田中尾遺跡』高鍋町教育委員会 一九八七年

*10 *20 柳沢一男「日向の古墳時代前期首長墓系譜とその消長」『宮崎県史研究』九 宮崎県史編纂室 一九九五年

*11 柳沢一男「古墳時代日向の王と生目古墳群」『生目古墳群シンポジウム'99 報告書浮かび上がる宮崎平野の巨大古墳』宮崎市・宮崎市教育委員会 一九九九年同「南九州における古墳の出現と展開」『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』第六回研究会資料集

九州前方後円墳研究会 二〇〇三年

*12 *22 和田理啓「日向の首長墓系譜」『九州における首長墓系譜の再検討』第十三回研究会資料集 九州前方後円墳研究会 二〇一〇年

*13 *15 *31 *47 谷口武範「持田古墳群からみたその社会」『えとのす』三十二新日本教育図書 一九八七年

*14 柳沢一男「2. 宮崎平野部の古墳と古墳群」『宮崎平野の古墳と古墳群』第二九回九州古墳時代研究会資料集 二〇〇三年

*16 *18 *28 長津宗重「2章 古代の日向国」『宮崎県の歴史』四五 山川出版社 一九九九年

*17 *30 鈴木重治『日本の古代遺跡二五 宮崎』保育社 一九八五年

*19 有馬義人「南九州（日向・大隅・薩摩）」『前期古墳の再検討』第九回研究会資料集 九州前方後円墳研究会 二〇〇六年

*21 梅原末治氏による（梅原一九六九）と、持田一号墳は盤龍鏡と獣文縁 獣帯鏡の二面が出土したという。対して柳沢一男氏（柳沢一九九五）は、獣文縁獣帯鏡が踏み返し鏡の可能性が指摘されていることに注目し、この鏡が一号墳に伴うかは疑問とされている。

*23 埴輪の実測図は谷口一九八七を参照されたい。なお、後円部の

粘土礫から金銅装単龍鳳環大刀を含む直刀が出土したが、この時期は六世紀末葉にあたるので埴輪とは齟齬をきたす。この埴形は三葉形環大刀を出土した二八号墳よりも古相を示している。埴輪の時期を優先させておく。粘土礫は墳丘下〇・三mと比較的浅い位置になるので二次埋葬の可能性がある。

*24 *32 長津宗重「日向」『前方後円墳集成 九州編』山川出版社一九九二年、「日向における古墳時代首長墓の動向」『九州における古墳時代首長 墓の動向』九州考古学会・宮崎考古学会合同

学会実行委員会一九九五年
*25 北郷一九八七及び北郷泰道「九州南部（宮崎・鹿児島）」『古墳時代の研究』十 雄山閣出版一九九〇年

*26 林田和人「東九州の舟形石棺」『宮崎考古』第十四号
宮崎考古学会一九九五年

*27 梅原一九六九参照。七六号墳は円墳または前方後円墳（帆立貝式古墳）かは、現況では判断つかない。なお、七六号墳は別の埋葬主体から心葉形十字文透鏡板付轡や心葉形三葉文杏葉の可能性がある馬具が出土したので六世紀中葉く末葉前後に別途埋葬されたと考えられる。

*29 杉井健「肥後地域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」『九州における首長墓系譜の再検討』第十三回研究会資料集

九州前方後円墳研究会 二〇一〇年
*33 和田晴吾「古墳時代の時代区分をめぐって」『考古学研究』三四・二

一九八七年 近年では、日南市狐塚古墳における銅鈴の七世紀前葉の副葬事例がある。

*34 有馬義人「装飾付大刀」『後期古墳の再検討』第十一回研究会資料集
九州前方後円墳研究会二〇〇八年

*35 甲斐貴充「持田古墳群」『宮崎平野の古墳と古墳群』二〇〇三年
*36 *38 津曲大祐「南九州（日向・大隅・薩摩）」『後期古墳の再検討』

第十一回研究会資料集 九州前方後円墳研究会 二〇〇八年

*37 山本格「町内遺跡発掘調査報告書」『高鍋町埋蔵文化財調査報告書』

第一〇集 高鍋町教育委員会 二〇〇四年

なお、二重周溝は持田八十四号墳例を含めるならば、現時点で十一例目となる。時期的には概ね六世紀後葉く七世紀前葉の例が多い。鬼ノ窟古墳や常心塚古墳といった突出した首長墓を含め、各古墳群内の上位に位置する古墳に採用されるようである。

長津宗重「第四章まとめ」（鬼の窟古墳）『特別史跡 西都原古墳群発掘調査報告書』第一集 宮崎県教育委員会二〇〇〇年
今塩屋毅行編「下耳切第三遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第百二十五集 宮崎県埋蔵文化財センター二〇〇六年

*39 梅原一九六九参照。なお、横穴式石室及びその可能性がある古墳は、新規発見の野首古墳群の2基を含めて二十二例を数える。野首古墳群は持田古墳群の対岸に存在し、横穴式石室墳主体（六世紀末築造、七世紀前葉まで追葬）の終末期群集墳である。小丸川流域には持田・野首古墳群例のほかに木城町永山古墳例（六世紀中葉築造）もある。小丸川流域では、六世紀中葉以後に首長墓級や新たに勢力を蓄えた有力集団の家長層に古墳の内部主体として採用されるようである。

九州前方後円墳研究会編『九州における横穴式石室の導入と展開』第Ⅱ分冊（資料編）一九九九年

堀田孝博「野首第一遺跡Ⅱ」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第一五七集 宮崎県埋蔵文化財センター二〇〇七年

*40 山本格「町内遺跡発掘調査報告書」『高鍋町埋蔵文化財調査報告書』第一集 高鍋町教育委員会 二〇〇五年

梅原末治氏のいう無号石室墳と、宮崎県教育委員会が昭和

五十四年調査した石室とが同一とみる見解（谷口一九九三年）と、別の石室とみる意見がある。ここでは前者の意見に従う。

藤木聡「第七章総括」（野首第一遺跡）『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第八六集宮崎県埋蔵文化財センター二〇〇四年

*41 *45 今塩屋二〇〇六年参照。

*42 桃崎祐輔「馬具」『後期古墳の再検討』第十一回研究会資料集九州前方後円墳研究会二〇〇八年。なお、宮崎県内出土の古墳時代馬具の集成とその背景について宮代栄一氏や東憲章氏の文献に詳しい。宮代栄一「宮崎県出土の馬具の研究」『九州考古学』第七〇号九州考古学会一九九五年

東憲章「宮崎県における馬具とその出土状況」『日韓シンポジウムそれでも騎馬文化はやってきた』宮崎県立西都原考古博物館二〇〇四年

*43 旧四九号墳の近くに三角縁神獸鏡が出土したが存在するが、分布状況からみると旧四八号墳から果たして三角縁神獸鏡が出土したかどうか疑わしくなる。

*44 藤本貴仁「宮崎平野部の群集―横穴墓を中心として」『宮崎考古』第十六号宮崎考古学会一九九八年

*46 古墳時代後期における、宮崎県出土の装飾付大刀の動向を簡単にまとめておく。装飾付大刀は柄頭だけでなく、六透窓の鐔や金銅製刀装具を含めるならば二十例を超える。最近ではえびの市島内地下式横穴墓より象嵌大刀が出土した。

装飾付大刀の保有者は、有力首長層のみならず、高塚群集墳や横穴墓といった、大小の新興勢力（あらたに造墓可能となった集団）の上位層も含まれる。畿内政権が地域を直接支配するために装飾付大刀を配布した動きの一端を示すであろう。持田二十六号墳の三葉環大刀、亀ノ甲一号墓の三墨環大刀、「百塚原」古墳出土の鞍橋金具は舶載品とされ、朝鮮半島との交

流を物語るものである

墳墓への副葬は、持田二十六号墳例（六世紀初頭）からだが、多くの場合は六世紀後葉～七世紀前葉頃に盛行する。高塚墳や横穴墓から出土する場合は圧倒的で、地下式横穴墓や箱式石棺墓の場合は僅少である。その種類は、環頭・円頭・頭椎・圭頭大刀と多種に及ぶ。環頭大刀は持田・祇園原・百塚原・本庄古墳群など伝統的な首長墓系譜を有する古墳群から出土する傾向がある。頭椎大刀は、高塚古墳築造停止前後から活動が活発化する横穴墓に多く、横穴墓群における築造開始期の中核的存在に副葬される傾向が強い。円頭・圭頭大刀は各地域における最後の首長墓（高塚墳）から出土するようである。

今塩屋毅行「日向における後・終末期古墳」『終末期古墳の再検討』

第十二回研究会資料集九州前方後円墳研究会 二〇〇九年
*48 日高正晴『西都原古代文化を探る―東アジアの観点から』

* 実年代の表記は、一世紀を前葉・中葉・後葉と三区分し、場合によって初頭や末葉の語を用いた。古墳時代の時期区分と実年代との関係（埴輪や須恵器）については、杉井健氏の見解を参考にした。土師器の編年や年代観は、久住猛雄氏の研究を援用した。

杉井健「肥後地域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」『九州における首長墓系譜の再検討』第十三回研究会資料集

九州前方後円墳研究会 二〇一〇年
久住猛雄「土師器」『前期古墳の再検討』第九回研究会資料集

九州前方後円墳研究会二〇〇六年
* 紀要執筆に関連する参考文献や発掘調査報告書の一部については紙数の関係で割愛させていただいた。



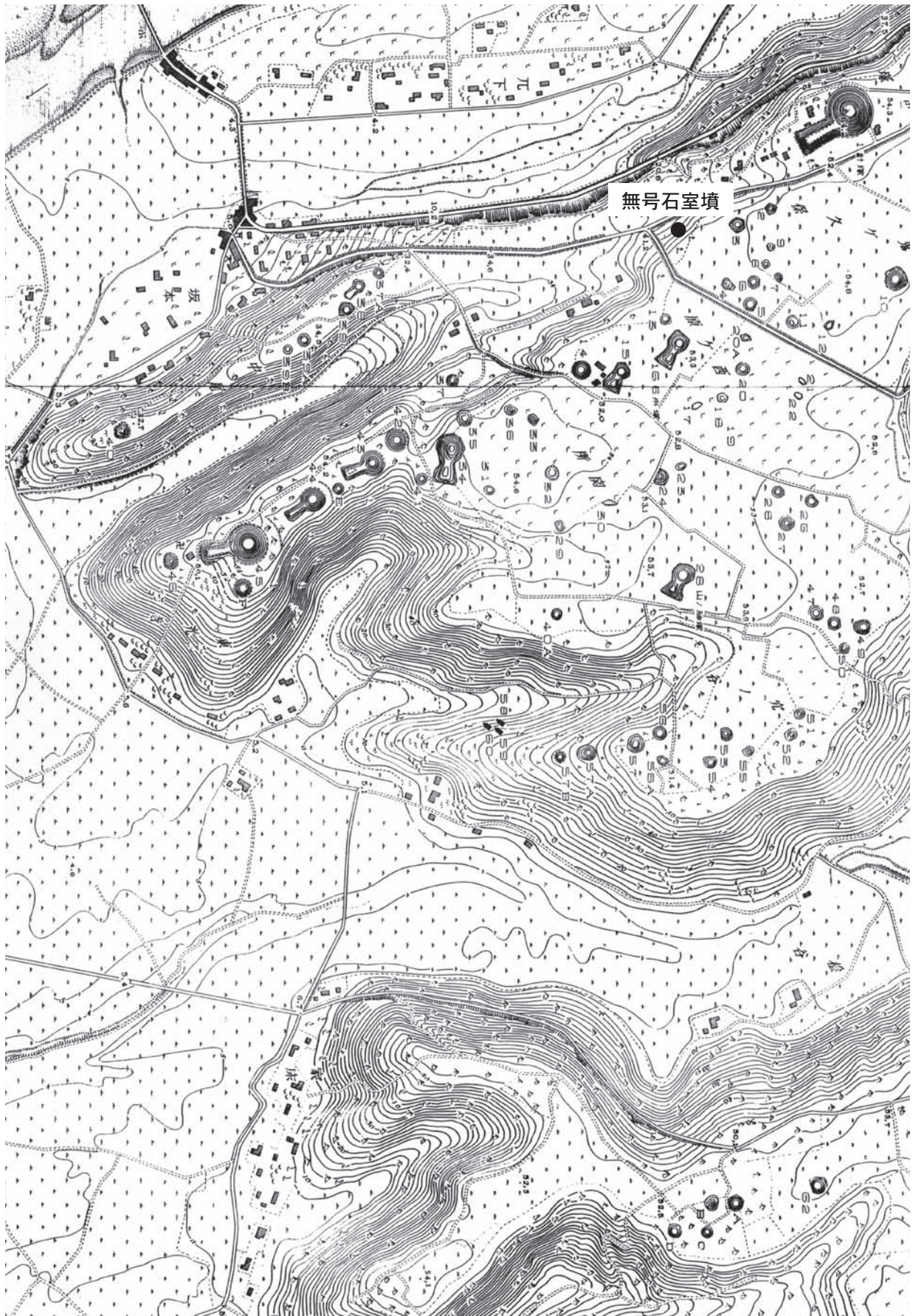
第1図 前方後円墳を含む古墳群の分布
(『宮崎県の歴史』より転載)



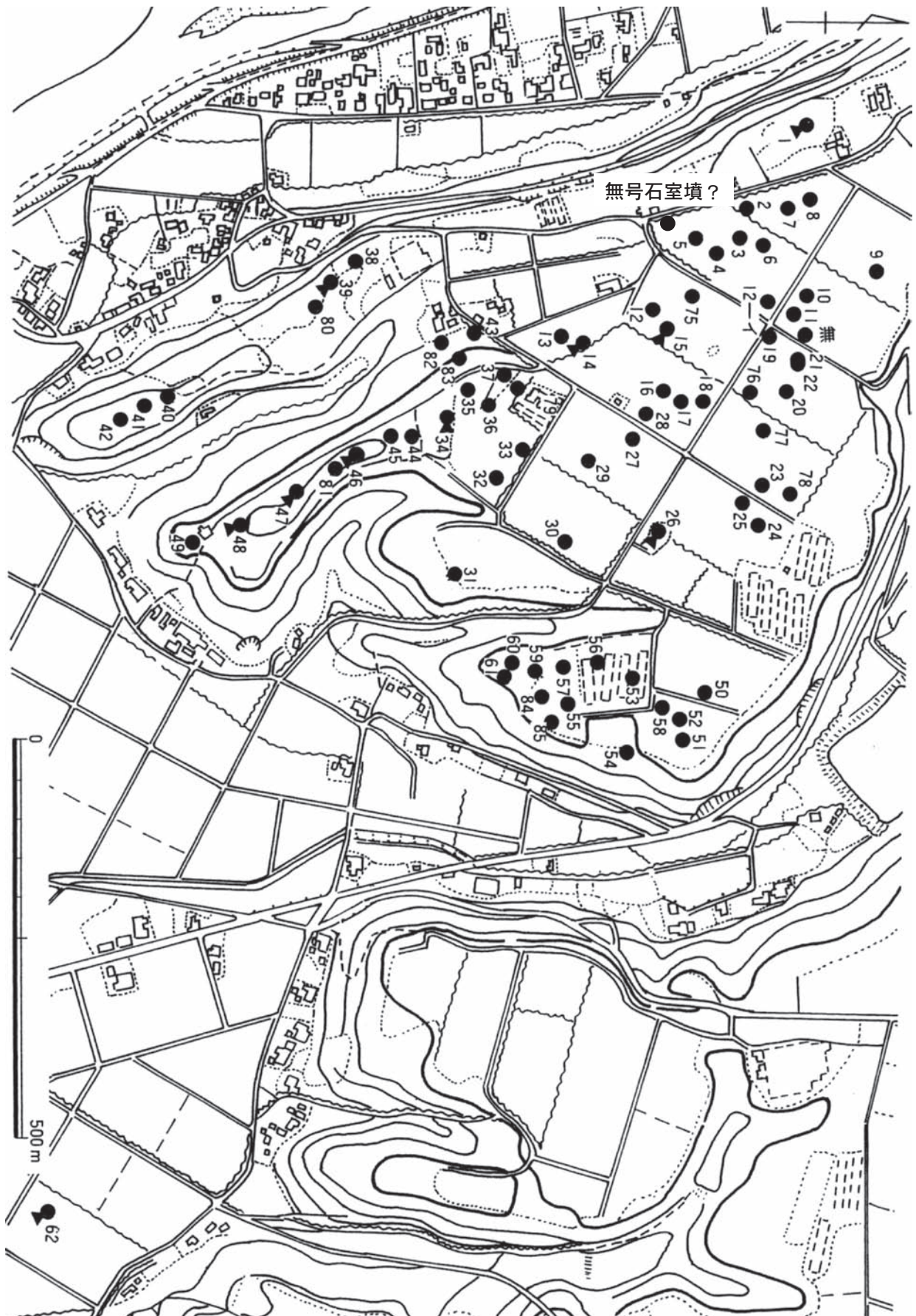
第2図 「児湯」地域の古墳と古墳群
(『宮崎平野の古墳と古墳群』より転載)



第3図 持田古墳群の位置とその分布 (『宮崎県史叢書 宮崎県前方後円墳集成』より転載)



第4図 持田古墳群の古墳分布 [1] (旧番号) (『持田古墳群』より転載)



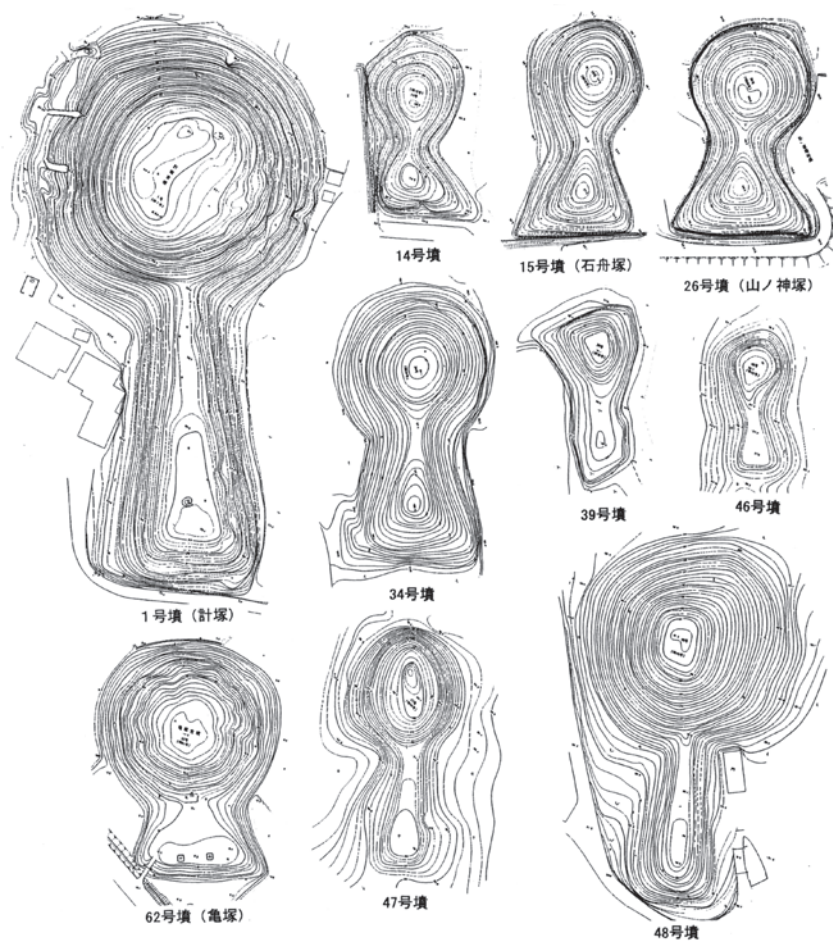
第5図 持田古墳群の古墳分布 [2] (新番号) (『宮崎県史』資料編考古2より転載)

新番号	旧番号	墳丘	主軸	規模 (m) 長× 円径 ×高	外部施設	内部主体	主体部の位置	副葬品
1	1 (計塚)	前方後 円墳	N-148° - E	120× 62×12.5	葺石	堅穴式石 室？(粘土 槨？)	後円部中央よりやや東 南、墳丘と斜行	盤龍鏡1、獣文縁獣帯 鏡1、刀子？
2	-	円墳	-	- 19.8×3.8	周溝	？	？	？
3	6	円墳	-	- 18×？	葺石	？	墳頂よりやや北西	直刀2、須恵器長頸埴 ？
9	10	円墳	-	- 32×5.8	二段築成 周溝	木棺？	？	勾玉、切子玉、小銅鈴 1
11	11	円墳	-	- 12×？	？	土壇？	東西方向	直刀1、管玉
12	13	円墳	-	- 15×1.6	葺石 周溝	土壇墓？	南東から北西方向	鏡2（1面は乳文鏡）、 勾玉、水晶玉、須恵器
13	14	円墳	-	- 20×3.7	墳丘に須恵 器甕片	礫床を有 する木 棺？	東西方向	直刀1、鏡3（1面は内 行花文鏡）、勾玉、管 玉、小玉
14	15	前方後 円墳	N-123° - E	41× 21×4	葺石 円 筒・形象 埴輪片	木棺？	墳丘の主軸と平行	画文帯神獣鏡？1、直 刀2、鉄鏃、勾玉、管 玉、南京玉
15	16 (石舟 塚)	前方後 円墳	N-101° - E	46× 24×4.2	二段築成	舟形石棺	？	？
16		円墳	-	- 15×3	周溝	？	？	？
19		円墳	-	- ？×1.9	？	？	？	？
23	25	円墳	-	- 16×3	葺石	？	？	画文帯神獣鏡1、変形 四獣鏡1、直刀1、勾 玉、管玉
24		円墳	-	- 15.5×2.5	周溝	？	？	？
26	28 (山ノ 神塚)	前方後 円墳	N-121° - E	46× 25.5×5	低い基段？	L字の配 石（3回 の複次埋 葬）	後円部中央の北寄り で南北方向、その西南 部	異式環状乳神獣鏡1、 直刀1、垂飾耳飾り、 金環2、三葉形環刀大 刀2、勾玉、管玉、切 子玉
27	24	円墳	-	- 25×？		木棺？	北西を頭位？	画文帯神獣鏡1、銅鈴1
28		円墳	-	- 12×1.4	周溝	？	？	？
29		円墳	-	- 13×1.8	周溝	？	？	？
30	40A	円墳	-	- 10×？	？	？	南北方向？	変形四神四獣鏡1、歯 牙形垂飾品、銅鈴、金 環、勾玉
31	-	円墳	-	- 26.5×3.3	周溝	？	？	？
33	-	円墳	-	- 17×2.3	周溝	？	？	？
34	34	前方後 円墳	N-101° - E	59× 33×5	周辺から円 筒埴輪周溝 (盾形？) 周庭	土壇（木 棺？粘土 槨？）	墳丘の主軸と平行	変形四獣鏡1、直刀2 （一つは金銅装束鳳環 刀柄頭）、鉄鏃、勾玉
35？	35	円墳	-	- 20×？	？	？	？	鏡、ガラス小玉
39	38	前方後 円墳	N-138° - E	38× 21×3.8	堅穴式石 室？	？	墳丘の主軸と平行	内行花文鏡1、直刀1、 金環、銀環、管玉
46	43	前方後 円墳	N-159° - E	51× 27×5	葺石	？	？	？
47	44	前方後 円墳	N-139° - E	54× 30×5.4	葺石 周溝？	堅穴式石 室？（礫 床）	墳丘の主軸と平行	直刀1、勾玉、管玉
48	45	前方後 円墳	N-162° - E	85× 50×7.5	葺石	堅穴状石 室？(粘土 槨？)	墳丘の主軸と平行	鏡3（1面は画文帯神獣 鏡？）、直刀1、鉄 鏃？
50	55	円墳	-	- 15.7×1.9	周溝	？	？	鏡1、直刀、小銅鈴2、 勾玉、須恵器杯
53	56	円墳	-	- 20×？	？	？	？	杏葉、轡、雲珠、甲 冑？、鉄斧、勾玉、銀 製小空玉
57	-	円墳	-	- 20×3.7	周溝	？	？	？
59	-	円墳	-	- 13.5×1.6	周溝	？	？	？
62	61 (亀塚)	前方後 円墳 (帆立 貝式)	N-159° - E	50× 39×7	葺石 家形埴輪	組み合わ せ木棺の 直葬	墳丘の主軸と平行	？
76	20	前方後 円墳 (帆立 貝式？)	-	？ 11×？		主体部二 箇所？	後円部に東西方向とそ の北東側に北東から南 西向きの二箇所？	第1主体（剣1、鏡1、 轡、雲珠、杏葉、玉 類） 第2主体（画文帯環状 乳神獣神鏡1、直刀1、 勾玉）
78	-	円墳	-	- ？×3.1	？	？	？	？

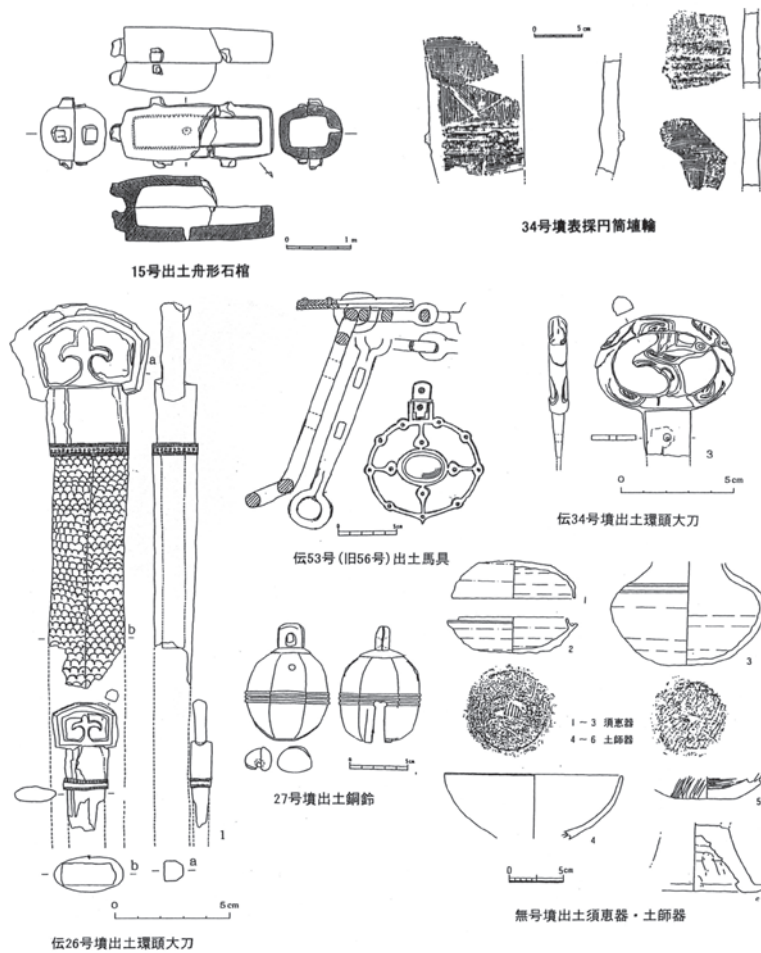
第1表 内容の一部が判明した古墳一覧表（1）

新番号	旧番号	墳丘	主軸	規模 (m) 長× 円径 ×高	外部施設	内部主体	主体部の位置	副葬品
84	-	円墳	-	- 13.5×2.9	周溝	横穴式石室	N-15° -E	青銅製品、刀子1、小札
持田中尾古墳(42)	40?	円墳	-	- 24×?	?	木棺直葬	S-44° -E	?
?	無号石室墳	円墳?	-	- ?	?	横穴式石室	西南に開口	銅環2、鉄鏃、勾玉、管玉、須恵器杯・身、埴
?	2	円墳	-	-	?	?	?	須恵器蓋坏
?	8	円墳	-	-	?	?	?	直刀、須恵器長頸埴
?	29	円墳?	-	-	?	?	?	銀環、管玉、鉄剣
?	31	円墳?	-	-	?	?	?	直刀、須恵器蓋坏、瓶
?	39	前方後円墳 (帆立貝式?)	?	? ?×5	?	?	?	?
?	47	円墳	-	-	?	?	?	勾玉、管玉
?	48	円墳	-	- 20×?	?	?	?	三角縁獣帯四神四獣鏡1
?	49	円墳	-	- 20×?	?	?	?	杏葉、鏡板、雲珠、小鏡1、横口埴、金銅装の断片、土玉
?	53	円墳	-	- 20×?	?	横穴式石室?	?	金銀環、ガラス玉、鉄刀、須恵器
?	54	円墳	-	- 20×?	?	?	?	勾玉、須恵器蓋坏
?	57	円墳	-	- 20×?	?	? (蓋石有り)	?	須恵器蓋坏

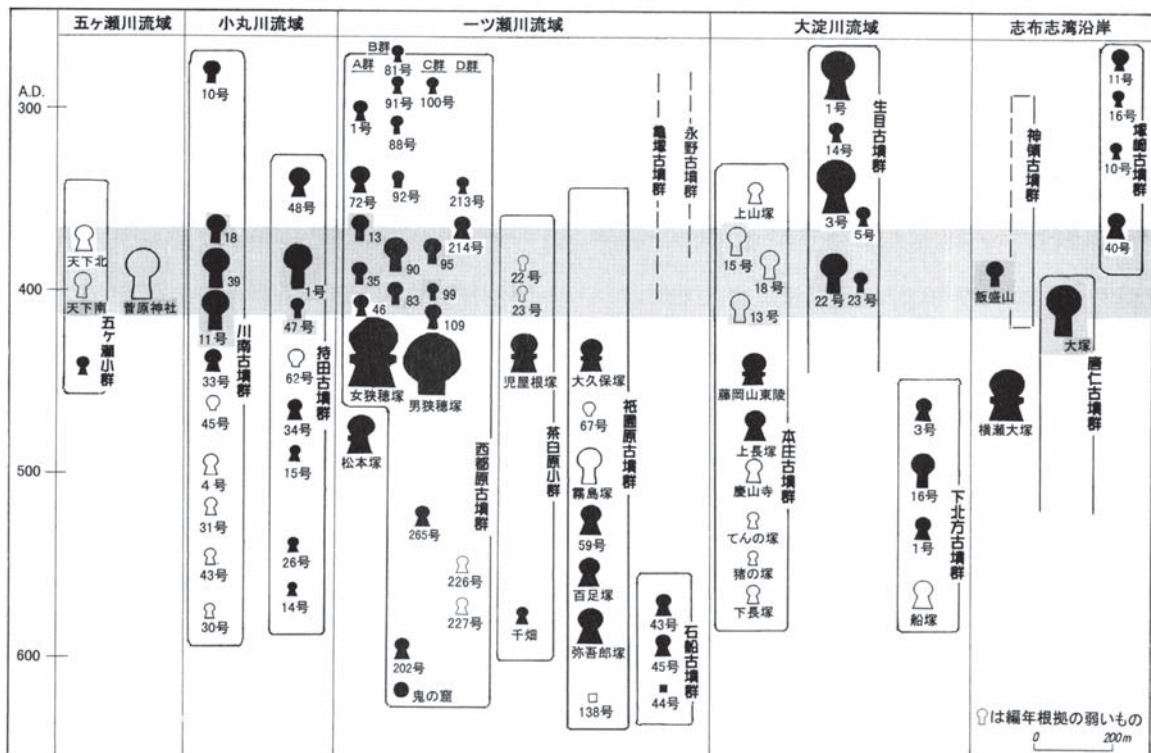
第2表 内容の一部が判明した古墳一覧表(2)



第6図 おもな前方後円墳の測量図 (S=1/1500)



第7図 出土遺物の実測図



第8図 柳沢一男氏による南九州の主要首長墳の編年
(『生目古墳群シンポジウム'99 報告書浮かび上がる宮崎平野の巨大古墳』より転載)